

寺社仏閣を活用した地域の活動拠点づくり

人口・地域経済研究室	最上	辰徳
地域リーダー養成課	松永	伶朗
編集室	柏木	俊哉

目次

1. はじめに	1
2. 調査事例	1
(1) 平田寺～寺社が自ら取り組んでいる事例～ (愛知県北名古屋市)	2
① 平田寺の概要	
② 「こども食堂」の活動	
③ 活動の成果	
④ 今後の展望及び課題	
(2) 初瀬門前町～寺社に付随するまちが取り組んでいる事例～ (奈良県桜井市)	4
① 長谷寺及び門前町の概要	
② NPO 法人泊瀬門前町再興フォーラムの取組	
③ 桜井市役所の取組	
④ 今後の展望及び課題	
3. まとめ	7
(1) 取組の意義	
(2) 寺社の役割についての考察	

1. はじめに

元来、寺社はその地域の歴史とは切っても切れないものであった。しかし、現代において、特に地方部における氏子・檀家の減少や核家族化の進行に伴う若年世帯の寺社との関係の希薄化などにより、寺社の運営・存続が困難となる事例が増加している。その構造的な理由を仏教系寺院を例に示すと、一般的に宗教法人である寺の収入は大きく分けて、葬儀や法要などの際に檀家から受け取るお布施と、檀家の年会費である護持会費の2種類からなる。したがって檀家数の減少は、寺院の収入減少に直結し、その運営を圧迫することになる。地方の、特に過疎化が進む地域の寺院の多くは人口減少の影響を大きく受けており、一部で若い女性を中心としたパワースポット巡りや御朱印巡りなどで拝観料などの収入を得る動きがあるとは言え、それらは京都、奈良などの一部の有名な寺社に限られている。

こうした厳しい環境の中、人が集う仕組みづくりに先進的に取り組んでいる寺社が存在する。当グループでは、こうした取組に注目し、地域における寺社の位置づけを再考するとともに、地域の活性化に寄与する寺社の先進事例の考察を通して、寺社がまちづくり・地域づくりでどのような役割を果たせるのかを検討する。

調査事例については、「寺社が中心となって地域づくりに取り組んでいるもの」として愛知県北名古屋市の平田寺、「寺社に付随する門前町が中心となって地域づくりに取り組んでいるもの」として奈良県桜井市の初瀬門前町の2つの異なる取組を選定した。

2. 調査事例

(1) 平田寺～寺社が自ら取り組んでいる事例～

① 平田寺の概要

平田寺は愛知県北名古屋市にある古刹である。室町時代末期に創建され、天台宗から曹洞宗への改宗などを経ているが、一貫して地域の人々の信仰の中心となってきた。しかし、次第に檀家が減少したことなどにより寺の維持が困難となり、後継者が現れず平成15年に無住職となった。現住職である長谷川史道氏は、4年間無住職となっていた同寺に平成19年に住職として入寺した。



平田寺

現在、平田寺では「お寺キッチン平田寺こども食堂（以下「こども食堂」という。）」

や有機農産物や加工食品等を販売する「自然と暮らしの市場」「太極拳の会」など多岐にわたる活動を、地域住民だけでなく地域外の人も巻き込んで行っている。

平田寺でこのような活動を行うようになった背景には、長谷川住職の寺への思いがある。長谷川住職は、寺社は古くから人々が集い、行き交う地域コミュニティの中心であったと考えている。その実践を目指し、平田寺を「開かれたお寺」として宗派、宗教の垣根を超えて誰もが気軽に集い、学び、支え合う場とするために前述のような様々な活動を行っている。また、長谷川住職の妻の裕美子さんが「寺には本堂など、広いが限られたときにしか使われない部屋があることがとてももったいない」と話したことも活動のきっかけになったという。

②「こども食堂」の活動

平田寺では、地域住民が主体となって食事を提供するこども食堂を、毎月第2日曜日に開催している。食事をするための決まった資格や参加費は必要なく、子どもは無料で、大人は任意の金額を寄付することで、宗教、宗派を問わず誰でも気軽に食事ができる。



ボランティアにより運営されている

食堂は地域の人々をはじめとするボランティアによって運営されている。活動当初は料理の先生を招いていたが、スケジュールの調整が困難になるなどしたため、裕美子さんの知人の女性たちに声をかけて食事作りなどを手伝ってもらうようになった。現在は、地域の人や趣旨に賛同する協力者が自発的に食事作りに参加している。

こども食堂には長谷川住職夫妻も参加する。しかし、二人が行事などのために不在である時は、一食当たりの値段を大まかに設定し、協力者に全て任せて食事を作ってもらうなど、寺主体ではなく、協力者主体で運営している。



こども食堂の様子

また、こども食堂の運営費の多くが上記の寄付で賄われている。活動の趣旨に賛同してくれた人が必要な食材を寄付してくれたり安価に提供してくれたりする場合もあり、収支はプラスマイナスゼロの状態だという。

取材の際には食事を作る側、食べる側、双方に多くの人が参加しており、皆が笑顔

で和気あいあいと食事を楽しんでいた。

③活動の成果

こども食堂の協力者は前述の通り全てボランティアであるが、全員が檀家というわけではない。平田寺はもちろんのこと、仏教自体に全く関わりのない人も積極的に協力している。また、平田寺ではこども食堂以外に、地域の住民皆が集える場所として「自然と暮らしの市場」や住職も参加する「太極拳の会」などの活動も行っており、これらも檀家以外の人も参加している。寺とは関わりのなかった人が自発的に活動へ参加・協力していることから、平田寺の活動が着実に地域の人々に浸透していると感じられた。こうした活動は SNS で発信されており、その活動の広がりは一役買っている。



太極拳の会の様子

参加者へのインタビューでは、平田寺のある北名古屋市以外からの参加者や、こども食堂に参加したことをきっかけに自らママ友が集うサークルの立ち上げを計画する人もいた。平田寺が人と人とのつながりの輪を拡大する場となり、参加者の行動にも影響を及ぼしていることが見て取れた。

④今後の展望及び課題

今後の課題について、長谷川住職は平田寺の財政上の問題を挙げた。

平田寺は檀家が減少したために維持が困難となり無住職となっていたが、長谷川住職が入寺して以降もあまり好転していないという。

こども食堂や自然と暮らしの市場などの活動は全て寄付や参加者の手弁当で運営されており、収益を生み出してはいない。これらの活動は、寺を住民の交流の場とする点では十分な成果を出しているものの、寺の経営状況の改善には至っていない。そのため長谷川住職は平田寺住職以外の業務も兼務することで、平田寺の運営を支えている。

今後は現在の活動を通じ、檀家が増えることで平田寺が単独で維持、運営できるようになればよいと長谷川住職は考えている。しかし、本来の宗教的活動以外の活動について理解を得られない檀家も中にはいるという。今後はこうした方々の理解を進め、更に平田寺の活動に参加してもらうことで、より地域の繋がりを深めていきたいと長谷川住職は語ってくれた。

(2) 初瀬門前町～寺社に付随するまちが取り組んでいる事例～

① 長谷寺及び門前町の概要

長谷寺は奈良県桜井市にある真言宗豊山派の総本山である。8世紀初頭に道明上人によって建立された。当初は地方の一寺としての位置づけであったが、8世紀末より長谷観音信仰が高まり、観音信仰の発祥地として繁栄していった。「枕草子」「源氏物語」など多くの古典文学に登場する名刹であり、現在でも牡丹や桜、アジサイ、キンモクセイなど、一年中花に彩られる「花の御寺」としても知られている。

その長谷寺を中心に形成された町が初瀬門前町である。伊勢神宮参詣の通過点にあり、鎌倉時代から室町時代にかけて宿場町として栄えた。昭和40年頃までは飲食店や旅館が軒を連ね、大いに賑わっていたという。

しかし、近年は人口減少や高齢化の進展により、同地区は桜井市内で高齢者人口が最も多く、若年人口が最も少ない地域となっており、また、観光の多様化などの影響もあり、ピーク時に比べ観光客数も半減している。こうした賑わいの低下により空き家が増加し、かつての町並みが失われつつあった。



かつては賑わいを見せた門前町も空き地が目立つように

② NPO 法人泊瀬門前町再興フォーラムの取組

そのような状況を改善しようと地域有志の手により平成17年に立ち上げられたのが、「NPO 法人泊瀬門前町再興フォーラム（以下「フォーラム」という。）」である。フォーラムは、毎月18日に長谷寺が舞台とされる「わらしべ長者」のストーリーを描いたのれんを門前町に飾りつけるイベントを運営するほか、清掃活動やフリーマーケットの開催などの様々な活動を通じて初瀬門前町の活性化を図っている。

平成21年には、フォーラムと奈良県及び早稲田大学が連携して「門前町における景観まちづくりの推進」事業をスタートした。この事業では、ワークショップを重ねることで地域の課題を洗い出し、景観まちづくりの推進にとって重要な地域資源活用の方向性やイメージの共有を進めた。

平成24年にはフォーラムに長谷寺、地元観光協会、自治会などを加え、「初瀬門前町景観まちづくりの会」を設立した。同会では、町家などの資源を活かした景観再生や保存について会議を重ね、翌年「桜井市初瀬地区景観まちづくり提言書」を桜井市

に提出した。

現在フォーラムは、これまで行ってきたイベント運営に加え、行政からの補助を受けて様々な活動を展開している。例えば、空き家だった町家を改修した「コミュニティ町家 泊瀬長瀬長者亭」では、食堂の運営や地域で採れた生鮮野菜などの販売を行っている。これは、門前町には食堂や商店が少ないという課題に対応したものである。同様に、町家を改修した「憩いの森 くろもん」では、1階に観光客の休憩所や観光案内所、公衆トイレを設置し、2階には地域住民が集える場として地区で会合ができるような広間スペースを設置している。

このように、フォーラムは地域住民の暮らしやすい町、賑わいのある町に向けて、地域一体となって取組を進めている。



コミュニティ町家 泊瀬長者亭



憩いの森 くろもん

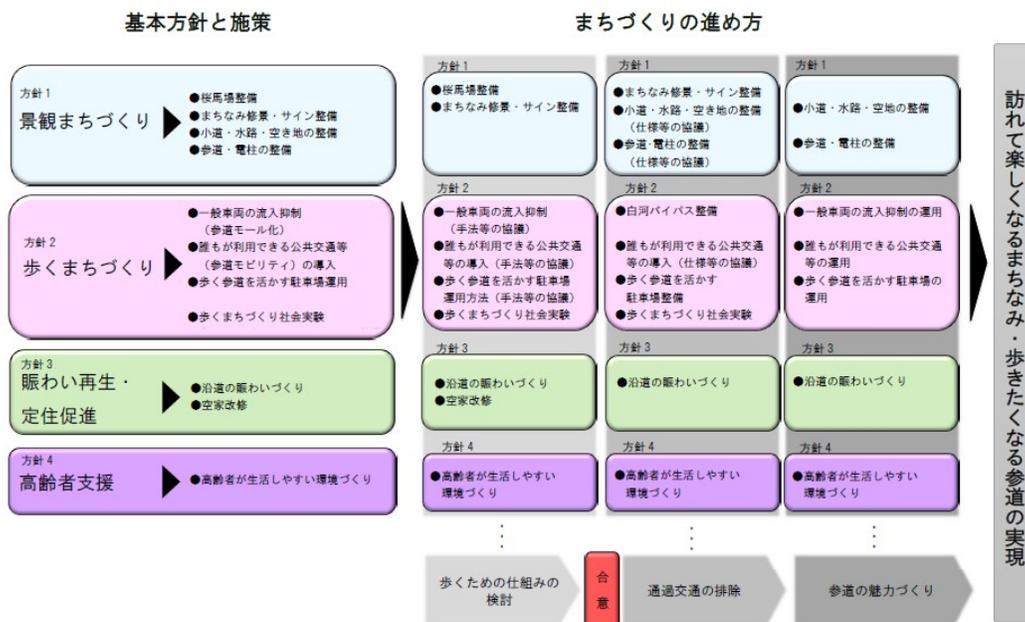
③桜井市役所の取組

前述した「桜井市初瀬地区景観まちづくり提言書」を受け、行政も門前町を含む初瀬地区のまちづくりへと動きはじめた。

桜井市は平成26年12月に奈良県と、平成28年3月に早稲田大学とまちづくり包括協定を締結し、「訪れて楽しくなるまちなみ・歩きたくなる参道づくり」をコンセプトに、①景観まちづくり、②歩くまちづくり、③賑わい再生・定住促進、④高齢者支援、の4つの方針を定めた「長谷寺門前町周辺地区まちづくり基本構想」を策定した。その後、地域住民との協議を重ね、平成30年5月に「長谷寺門前町周辺地区まちづくり基本計画」をとりまとめ、現在は、行政がまちづくりの中心的役割を担い、フォーラムをはじめとした地域住民と協働でまちづくり事業を進めている。

桜井市は初瀬地区のまちづくりにおいて、古民家改修や外国語併記の地区紹介フリーペーパーの作成などソフト・ハードの両面で大きな役割を果たしているが、特に財政的に地域だけでは対応が困難なハード面において、より重要な役割を果たしている。具体的には、「コミュニティ町家 泊瀬長者亭」「憩いの森 くろもん」などの古民家改修に対する助成のほか、「長谷寺門前町周辺地区まちづくり基本構想」のコンセプトにもある「歩きたくなる参道づくり」実現に向けた歩車分離のための県道バイパス道

路の整備や参道の一部区間の歩行者専用化などの計画を進めている。その計画の一環として、歩行者専用化に伴って高齢者や身体障害者の参拝が困難になる対策のため、低速電動自動車（グリーンスローモビリティ）運行の社会実験を実施するなどの取組も行なっている。



事業推進に向けた取組 【出典】桜井市長谷寺門前町周辺地区まちづくり計画

④今後の展望及び課題

桜井市は地域の要望を反映した「長谷寺門前町周辺地区まちづくり基本計画」を基に、「訪れて楽しくなるまちなみ・歩きたくなる参道の実現」をコンセプトとして、主体的に計画を進めている。フォーラムは、観光客に向けた地域のイベントの実施や改修した町家の管理など、ソフト事業を中心に取り組んでいる。今後は、桜井市とフォーラムをはじめとする地元 NPO 法人などが協力しつつ各々の役割を果たしていくことで、より地域のニーズに合ったきめ細かい事業の進展が期待される。

一方で、県が事業主体である県道バイパス整備などは、桜井市や地元住民以外の関係者が増えることで各種調整に時間を要し、計画通りに進まないことが懸念されている。

しかし、フォーラムの寺井修司理事長が取材で話した「私が子供の頃の長谷寺は、大勢の人が集まり、露店も並び賑わっていた。もう一度あの頃の賑わいを取り戻したい」という言葉から感じられるように、初瀬門前町の住民は熱意をもってまちづくりに取り組んでいる。地域住民にとって、長谷寺は地域のシンボルであり誇りなのであ

る。このような地域をよりよくしたいという強い思いが人を集め、繋ぎ、行政と協働した地域一体の取組体制が整えられたことから、初瀬門前町のまちづくりは今後も難局を乗り切って進展するであろう。

3. まとめ

(1) 取組の意義

人口減少や少子高齢化によって寺社運営・維持が困難な社会環境の中にあって、地方の寺社で地域に溶け込み住民の拠り所となれるよう活動している「平田寺」と、門前町の再生を住民主体で自発的に取組み始めた「NPO 法人初瀬門前町再興フォーラム」を今回調査した。

平田寺では「人が集い交流する場所」として地域内外の様々な人が交流し、さらに新たな集いが生まれる素地を創り出していた。SNS も活用しているこうした活動は、かつての寺社の機能である「地域コミュニティの中心」としての機能を現代に沿ったかたちで再構築し、更に新たなコミュニティの広がりをみせていると言えるだろう。

初瀬門前町では、かつての門前町の賑わいの復活を目的に地域の商店主や住民を中心にフォーラムという NPO 法人が設立された。県や大学と連携した振興策の検討などを経て桜井市を巻き込み、現在はまちづくり基本計画に基づき市が主体となって、まちづくり事業を実施している。また、フォーラムは、空き家だった町家の改修によって地域景観を維持しつつ、地域に不足していた食堂や生鮮食料品の提供などの機能を付加し、桜井市の中でも特に高い高齢化率である初瀬地区住民の生活を支える社会的役割も担っている。

(2) 寺社の役割についての考察

寺社の存在は祭りなどを通してその土地に住む人々が紡いできた歴史・文化そのものであり、その歴史・文化は、そこに住む人々の価値観やアイデンティティ、そして誇りを生み出してきた重要なものである。

今回の 2 つの異なる調査事例から導き出せることは、寺社は平田寺のような「実際にひとの集う場」として、また長谷寺のような「地域の心の拠り所」として、「ひととひとをつなぐ」機能を担っていることである。そして、寺社は、地域が存続していくうえでも重要な役割を果たしているということである。寺社が「地域のひととひとをつなぐ」機能を維持していくことは、人口減少や地域コミュニティの衰退が進む昨今において、一層重要となっている。

また、行政と寺社が情報交換を行い、行政施策などと連携することは、両者にとっても良い影響を及ぼす可能性がある。例えば、多くの自治体に取り組んでいる移住定住政策、空き家対策などについて、寺社は移住者と地域住民をつなぐ場となり得るの

ではないだろうか。移住により地域住民が増えることは、地域のイベントである祭礼の担い手確保の面で寺社にとって良い影響があり、また、移住者にとっても祭礼の担い手になることは地域に溶け込む良い機会になろう。

「地域のひととひとをつなぐ」という機能は、すぐに寺社の運営を好転させるものではないかもしれない。しかし寺社が、また寺社だけでなく地域そのものが、今後も存続していくためには必要な機能である。寺社は、むらの中心として存在してきた歴史的背景からそのポテンシャルを十分に果たすことができるはずである。